

家 山に生きるよりどころ

雪の上で相撲・屋根の上からそりっこ乗り

おら家（い）、野郎（やろ）っこばり三人だっちゃ。

この人たちね、われ家（い）の前（めえ）で相撲とってさ、このままペタペタペタって走ってきて、こう、（炉に）あだんの。うん、裸足で。濡れるまで、ほんでも靴履いてやってんの。そのうち濡れつつと、ベタクサなっからは、冷たくなって。で、どうしえ濡れっからはね。構あねえでおくと、火さあたって（裸足で）馳（はしえ）でくんだもん、外さ。今みたい服だらいいの。着物着てね、一枚でなく二枚も三枚も着しえて、上さ綿入れつつの着しえて、中さメリヤスつつの着てっから、あんまり冷たくはねえけど、それ濡れつつ冷たいわけさ、ほれ。厚いもんだから。濡れつつと騒ぐんだ、「寒い寒い寒い」どって。うちばり三人居すべ。隣にも居すべ。その人たち来て、みんなしで（相撲）とるから、面白（おもしえ）えばり面白（おもしえ）んだっちゃ。したら、栗っこなど笹さ入れてここさ置くとね、ほいづを食いながら遊んでたの。なんにもねえから、お菓子つつのねかったからね。

あと、橇っこ乗り、屋根から降ちんだったね。なんぼ「上がんな」つつたって、橇っこだり、スキーだりなんだりで降ってくんだ。あんとき、父ちゃんいねかったかなあ、山さ泊まって。親父いねえもんだから、怒る人いねえっちゃ。ほっぽっとくっちゃ、おらも。夜んなっと、提灯つけでやんだよ。あの柿の木、提灯吊るしてたもん。

ほんなけえ、雪降ったんだおねや。

（『升沢にくらす』 p.248）